

シリーズ NO.17

子育てコラム

「心を育てるコツ」

「タツタ、タツタ。」

四月、子ども達の走る足音だけで、一年生だなどわかります。危なっかしい走り方の子も達が小学校生活六年間で、身長は平均で約三十センチメートル、体重は約二十キログラム増えます。また、教科書を見てわかるように学習内容も段階を踏んで多くのことを学びます。体の成長や学習内容の変化は目で見てわかるのですが、心の育ちはどうでしょうか。

そこで、小学生の心の育ちを考えてみましょう。キーワードは「我慢・努力・挑戦」です。

低学年の子ども達は、自分は何でもできるという万能感を持っていて、自分が一番という思いが強くと、順番を守れることも大変です。ですから、やりたいけれど我慢する力を育てることが大切になります。しかし、ただ我慢しなさいと言っても我慢する力は育ちません。



蓮沼小学校長 石井由美子

あるお母さんが、子どもが転んだのを見て、「痛くない。」と怒鳴りました。すると子どもは何事もなかったように歩き出しました。これは本当の我慢の仕方ではありません。泣かれるとお母さんが面倒なので怒鳴っただけで、子どもは痛いとかつらいとかという感情をしまい込んでしまい、痛さを感じなくしてしまいます。体は傷つき痛いと感じているのに、痛いという感情を押し殺してしまいます。「ああ痛かったね」と気持ちを受け止めてくれて、それを「痛い痛い」の飛んでいけ」としてくれる。痛さを受け入れて痛いけどじっと我慢できたねと、我慢したことを認めてくれる大人がいてはじめて我慢することを覚えていきます。

中学年は行動範囲も広くなり大人の言うことよりも友達の間で言葉が大変気になるようになります。同年代の人間関係の作り方を練習す

る時期だといえます。そして、学習面では、覚えることがとても多くなる学年でもあります。漢字の数は六年生よりも多く、計算の問題も飛躍的に難しくなります。やりたくないけれど、やらなければならぬ努力する力が大切になります。人間関係も学習も一回やつたからすぐうまくいく、というものではなく、「何でできないの。」ではなく、しっかりと話を聞きながら「なかなかうまくいかないね。でも諦めずにやると、きっとうまくできるよになるよ。あなたはよくやっている。」と支え続けてくれる大人が必要になります。

高学年は、今まで培ってきた我慢する力や努力する力を発揮して、いろいろなことに挑戦してほしい学年です。下学年の面倒見たり、委員会活動・クラブ活動等のリーダーになったりすることで、人間関係を円滑に行うことの大変さや、責任をとることの重さを学んでいきます。そのような中で、自分は誰かのために役に立っているということを喜びとするようになります。家庭でも、分担された仕事を責任を持って遂行することで、自分は大変な存在だという自尊心が高まります。「なんで、もっとう

まくできないの。」ではなく「みんなをまとめる仕事は大変だね。あなたがいてくれて、本当に助かる。ありがとう。」と少し距離を置いて、信頼してみている大人が必要になります。

子どもの心の成長に丁寧寄り添うには、大人にも頑張りが必要です。しかし、小学校時代に心を育てようと思いつながら接していくと、嵐のような思春期を上手に乗り越える力が親子共にできてきます。「自分の一言が子どもの心を育てているのだ。私つてすごい。」そう思ってお子さんと向き合ってください。

自分を褒める。そして、お子さんの頑張りを感じるのですが、心を育てるコツではないでしょうか。

子育て相談を 受け付けています

子育てで悩んだ時、困った時など子育てに関する事なら気軽に相談ください。

相談電話 ☎(80)1456

※月・水・木・金曜日 午前9時～午後4時半（水曜午後、祝祭日を除く）

（教育委員会生涯学習課）